



「光徳寺善隣館だより」—初冬号—

発行人 光徳寺善隣館
理事長 佐伯 祐善

年の瀬の、寒気いよいよ厳しい季節となりました。
皆様いかがお過ごしでしょうか？今回は、皆様に工事の進捗状況と建替え応援団メンバーの取り組み等をご報告致します。
また、この度は、クラウドファンディングにたくさんのご賛同・ご協力いただきましたことをこの紙面をお借りいたしまして、厚くお礼申し上げます。



《建設工事ここまで進みました！》

現在の建替え工事では、2・3階の躯体工事と4階の梁の柱配筋と日に日に建物が高くなっています。左の写真は、12月10日に撮影した写真ですが、春を迎えての完成が楽しみです。

〈光徳ビル3階から撮影〉



《建替え応援団メンバーの取り組み》

建替え応援団メンバーは、新園舎建替えに伴い、「障がい児と地域のアート拠点とアーカイブギャラリー」を造るため、クラウドファンディングに挑戦することになりました。そこでは、近畿大学や大阪大学フロンティアボランティアサークルの学生さんたちの若い人の意見も取り入れながら、返礼品のTシャツデザイン、SNS発信やマイルームドア（子どもたちの部屋の扉）の意見等の協力をいただきました。また、大阪大学名誉教授の橋爪節也氏には、フランスの画家モリス・ド・ヴラマンクに祐三が「裸婦」の絵画を見せたところ「この、アカデミックめが！」と言われ、自画像である自分の顔を削り取ったという絵※のTシャツを用いて動画コメントのご協力をいただきました。

そして、前号でもお知らせしましたように、ビデオクリエイイトさんの監修によるクラウドファンディング（令和6年11月1日から12月16日）用の動画が大阪メトロ（地下鉄）中津駅の南改札の壁や柱にあるサイネージに配信されました。来年の2月からは、少し長めの中津学園のアーカイブが映し出されますので見逃した方も楽しみにお待ちください！尚、今回ご協力いただいた皆様に感謝とお礼を申し上げます。



《大阪大学名誉教授の橋爪氏のインタビューの様子》 ※《祐三の自画像》



建替え応援団メンバーとは？

中津学園の園舎老朽化に伴う建て替えをきっかけに集まった集団です。この施設は、兄・佐伯祐正の社会福祉の心と弟・祐三のアートの心を受け継ぐ拠点となるために日々活動しています。

《地下鉄中津駅のホームにて》

クラウドファンディングからの「つながり」について

11月に入って北区大淀地域のイベント（てんぐマルシェ）に建替え応援団メンバーである（一社）大正・港エリア空き家活用協議会 代表理事の川幡さまにお誘いを受け参加したところ、次々に地域内外の活動者さまや企業さまのご紹介があり数珠繋ぎのように、たくさんのつながりを持つことができました！！今回、つながりができた方々に新中津学園でのアートの拠点や地域との交流を目指す活動の周知に改めてご訪問や面談の機会を設けて頂きお会いすることができました。令和6年11月13日（水）には、①大正区（泉尾にもグループホームがあります）区長の古川さまと大阪市コミュニティセンター事務局長の岩本さまと面談。11月28日（木）には、北区で「つひまぶ」を発行されている編集長の浅香保リス龍太氏に中津学園までお越しいただき、クラウドファンディングのノウハウ等を伝授して頂きました。

同日の午後からは、②西田工業株式会社さまに訪問させていただきました。社長の西田さまから「地域貢献したい！」というお言葉もいただき、活動に賛同して頂きました。12月5日（木）には、旧中津学園職員であった水田さまから北区内で絵画ボランティアされている二口さまと③「スペースあけび」にて会食しながら楽しくお話しさせていただきました。報告：中津学園長渡辺祐子



①大正区長の古川さま・岩本さまと大正区コミュニティセンターにて

②西田工業株式会社さまの応接室にて

③「スペースあけび」にて

NHKと読売新聞からの取材について

④NHKの取材が12月3日にあり、12月12日の関西のニュースで放映されました。取材時の様子

⑤令和6年12月11日付読売新聞記事



④NHKの取材の様子

⑤令和6年12月11日付 読売新聞にて

コラム

「北の大火と中津の発展」

☆ セツルメント事業の先駆け祐正！！

1909（明治42）年に、北の大火（天満焼け）がありました。今の北区の東天満から福島区の下福島村までの距離4kmにわたり、丸2日焼け続けました。その被災者が、中津村に避難して来ると同時に、住宅建設が始まり多くの人に移り住みました。まだ中津は、旧の大阪市の郊外でしたが、この北の大火をきっかけに急速に中津村は、人口が増大していきました。1911（明治44）年に町制をひきます。のどかな農村から工場労働者層が多く住む町へと変貌していきます。

新淀川と並行して中津川がありました。この川に沿って紡績工場が立ち並び、年若い女子工員が、大阪近郊や京都・兵庫の農村から多数働きに来ていました。無論、住み込みです。その女工さんに裁縫等を教授していたのが、佐伯祐正の妻・千代子さんでした。貧民層には、授産所を設けて、近隣の主婦に内職作業を奨励しています。少年たちには、シューシャンボーイと名付けた一隊を大阪駅前で自活自立のため靴磨きを教え授産事業に繋げるなどの活動、すなわち、これらをセツルメント事業と言います。祐正は、寺院セツルメントを初めて大阪で行った方です。

替準備室：室長 河崎 洋充



善隣館の広報用写真アルバムより



内職作業中の様子



調理教授中の様子